

## 笑顔が素敵なネパールの人びと（平成28年2月）

ネパールは、お釈迦さまが生まれた国であり、世界の屋根ヒマラヤ山脈があるなど、興味の尽きない場所です。岡山県立大学では、近年、同国ナンバーワンのトリブバン大学との間で、さまざまな交流事業を展開しています。

そのひとつ、大学院看護学専攻学生の特別授業のため、我々7名は、昨年末のクリスマスの日、関西空港から旅立ちました。香港を経由し、ネパールの首都カトマンズ到着は深夜でした。重要政策を巡り、隣の大国インドとの対立が激化し、石油製品などの重要物資の輸入が著しく制限されるという、日本ではあまり経験の無い状況下での訪問でした。首都及び周辺地域でさえも、毎日10時間程度の計画停電が続いていたことから、朝晩は零下になる気温の中でも暖房が使えず、また街中では、ガソリンを求める自動車が、長蛇の列となっていました。そうした中でも、無線LAN（W i f i）は使うことができ、シャワーも浴びられないのに、インターネットには接続できるという、今風な現象に驚きました。

繁華街のはずれで、幼い子ども2人に出会いました。一人は恥ずかしがり屋、もう一人はとても人懐っこく、撮った写真を見せてくれと激しくせがみます。笑顔が本当に素晴らしく、慣れない環境下で緊張している私たちを、ほっとさせてくれるひとときでした。



2015（平成27）年4月25日のお昼前、首都からほど近い場所を震源地とするマグニチュード8クラスの大地震が発生しました。死傷者が2万人を超す大惨事となりましたが、救援最前線基地として選ばれたのが、トリブバン大学医学部付属教育病院でした。次々と運び込まれる被災者への対応・処置は本当に大変だったと思います。目まぐるしい日々が過ぎ去ったある時、アメリカの新聞が記事にしました。「ネパールの医師や看護師は、大災害の最中でも微笑みを絶やさない。」

今回の訪問でこの逸話を知り、同病院の院長さんに、その理由をお尋ねしました。答は、ごくシンプルです。「そうするしかなかったから。」一方、災害看護の実践学習をテーマに訪問した本学学生は、被災者キャンプにも立ち寄りしましたが、厳しい生活の中でも笑顔を忘れず生活している方が多かったようです。

世界遺産に指定されている史跡を、何箇所か訪れてみました。いずれも大地震の際に建物上部が崩れ落ち、基台の部分しか残っていません。横にある案内看板と見比べると一目瞭然です。史跡周辺にはお土産物屋さんや飲食店なども多く、ネパールの主要産業である観光へのマイナスの影響が心配されます。



カトマンズでは、市街地からでも、5,000m~6,000m級の高山を、遙か彼方に眺めることができます。頂に雪を抱いた神々しい山々を毎日見られる、それだけでも何と素晴らしいことでしょう。また、ネパール→インドとほぼ同じ→インド風の容貌、と私は単純に考えていました。しかし、思いがけず日本人やモンゴル人に似た顔立ちの人が多く、さらに欧米系の人も少なくないことから、実情は相当多民族・多文化だと気付かされました。歴史的背景によるものですが、それは食事の面でも同様で、中華料理風など他国の影響を受けたとおぼしき食べ物や飲み物を、たくさん楽しむことができました。

私たちの宿泊ホテルの周りには学校が多く、教室や校庭から元気な声が聞こえ、また道路では、瞳をキラキラ輝かせた多くの子どもたちに出会いました。ネパールは、日本の4割ほどの面積に、約2,800万人が住んでいますが、平均年齢は23歳前後で、15歳未満が全人口の約35%を占める大変若い国です。経済発展や教育の充実など様々な課題がありますが、トリブバン大学との交流を通じて、ネパールの皆さんの幸せのために本学が少しでも貢献できればとあらためて強く感じた、初めてのネパール訪問でした。